第19回

地域で支える認知症ケア

認知症の高齢者を支える ～街中であった事例～

立ち止まり、キョロキョロしながら道に迷ったようなそぶりの老婦人。たまたまそこを通りがかった女性が声をかけると、「家に帰りたいのだが道がわからない」と言うので、一緒に家を探すことにしたそうだ。

会話もスムースにつながらないので、認知症だろうと思い、持っていたバッグに家の連絡先がないか探したら、高齢者住宅の連絡先カードが出てきた。みると大手事業者の運営するホーム。そのホームの入居者と確認し、帰り道がわからなくなり困っているので迎えに来てほしい旨を電話して迎えを待つことになった。

これで安心と思いきや、30分経っても迎えは来ない。再度電話すると、要領を得ない返事で、しぶしぶこれから迎えに行くという。

ようやく高齢者住宅の車が到着したが、入居者を乗車させるやいなや、「お世話になりました」のお礼の一言もなく走り去った。認知症の知識が多少あったので親身に対応したのに、電話を受けた職員や、車で迎えに来た職員の度重なる態度の悪さに憤まんやるかたない思いをいだいた。

この高齢者住宅の運営の拙さを図らずも知ってしまったと、対応した女性は苦々しげに話す。もし自分が声をかけなかったらどうなっていたかと心配する。しかし、このようなケースは日常化している。

高齢者住宅にとって重要なのは ハードよりもソフト

この高齢者住宅は、サービス付き高齢者向け住宅(サ高住)で、自立から入居でき、要介護になっても一貫して住み続けることができる、もっとも安心できる介護システムが組み込まれている。

建物は高齢者向けの配慮が行き届き、自立者向け居室はバリアフリー対応で、緊急時対応設備、安否確認センサーなどが設置され、共用スペースにはラウンジ、ダイニング、大浴場などがある。要介護者向けには認知症にやさしいデザインで有名な、ある機関と提携し、建物には細かな配慮がなされている。設計・建物・設備においては、これに勝るものはないほどの出来栄えだ。

「ケアやデザインをとおして認知症の人が暮らしやすい環境をつくるため、地域を巻き込んだ認知症にやさしいコミュニティを確立させるため、さまざまなプロジェクトに取り組んできた」、ある機関の認証を受けているというサ高住が、前述の事例を引き起こすとは、この認証とはなんだったのだろう。日常、起こりえる認知症ケアの基本すらできていない。

事業所内で「認知症の○○さんが外出中」との共通認識があれば、少なくとも発見時点での事後対応は的確に行われたことだろう。

認知症の行動・心理症状(BPSD)への対処方法は、本人の生い立ちや性格などにより一律ではない。生活歴や、嗜好などを日頃、家族との会話から聞き出し、BPSDの原因と対処法を探り出し、職員全体で共有しなければ、このようなケースを防ぐことはできない。

認知症の高齢者を支援する 社会的動きに変化の兆し

一方、お世話した女性は、認知症の人に身近に接したことがあり、「認知症サポーター養成講座」を受講するなど、認知症に対する理解があった。一般市民が、さほどの抵抗もなく声かけして支援することができたのは、認知症に対する啓発活動によって、社会の理解がじわじわと浸透し始めてきた兆しの表れだ。

医療従事者による認知症の的確な診断と、ケア職員の温かい介護と、適切な認知症療法の提供、そして地域のこのようなさりげない支援によって、認知症の人の平穏な暮らしを支えることができる。高齢者住宅の運営は、ともすれば密室化しがちなため、地域との日頃からの連携や密接な関わりが必要だ。地域住民を対象としたホーム主催の認知症基礎講座や、認知症をかかえた家族に対するケア教室の開催など、地域と一体になった積極的な取り組みが必要となっている。

認知症高齢者のBPSDは日常的に発生する。高齢者住宅運営事業者は、より地域と密接にかかわり、事故を未然に回避しなければならない義務を負っている。

Name 田村明孝
たむら・あきたか
Profile タムラプランニング&オペレーティング代表。有料老人ホームなどの開設コンサルティングのほか、全国の高齢者施設、介護保険居宅サービス、自治体の介護保険事業計画のデータベースの収集・販売などを手がける。高齢者住宅連絡協議会総監督。